

パネルディスカッション質疑応答録

パネルディスカッションにおいては、パネラーからの報告の後、最後の報告者である駒込武会員から他のパネラーへ向けられたコメント、及びフロアーからの質問に対する回答が行われた。以下、その際の質疑応答録を編集部で編集の上掲載する。

【川島真会員（司会）】

時間がだいぶ押しておりますが、今の駒込会員のお話にも、すぐお答えいただくのもためらわれますので、フロアーから、ご質問を5分間受けたいと思います。今、この段階で挙手いただいて、コメント、ご質問を頂戴してから、それぞれのパネラーからお答えいただくというスタイルをとりたいと思います。今、この段階でご質問のある方は、手をあげていただけますか。お一人、お二人…、じゃあ、これで締め切ってよろしいでしょうか。はい、これで締め切ります。まずは、塚本会員、お願いいたします。

【塚本元会員】

法政大学の塚本と申します。10年前、創立大会のパネルディスカッションで、佐藤会員と並んで、壇上にあがった者であります。政治に関しては、確か若林会員、本日その他のすべての分野、政治・経済・社会・文学・歴史の五つの分野、それぞれ一人ずつの報告者がいたわけです。

私が専門とするのは政治でありまして、私が担当したのは、中華民国と台湾、あるいは中華民国政治史と台湾、というテーマだったわけです。この分野の発表者がこの10年間でいなくなりました。これはなぜかと考えると、台湾をめぐる状況の変化によって、中華民国という問題が、松田会員が代表してお話になった「政治」、台湾政治の一部になったということではないのか。確かに、現在の台湾に存在するあの政治的な実体は、中華民国という名称を使用しております。そして、ごく少数の国ですけれども、これを主権国家として承認している国もあります。しかし、全体的にみれば、台湾は国際社会で主権国家としては承認されておられません。そういう状況の中で、いわば、私の思いつきでありますけれども、台湾という政治実体の中の、ある政治シンボルとして中華民国というものが残り、そして、中国全体というものを前提とする中華民国というシンボルが、ごくの少数の国を通じて、かろうじて、主権国家からなる、現在の世界の中での台湾の位置を、規定していくと。このように考えることもできるのではないかと。この変化をもたらしたのは、若林テーゼ、「台湾の民主化は、本土化と同時並行的に進んだ」ということではないかと。質問よりもコメントですが、以上で終わります。

【川島真会員】

ありがとうございます。基本的には松田会員へのご質問、コメントだというふうには受け止めました。では、下村会員お願いします。

【下村作次郎会員】

すみません。私も基調報告者の一人であることを忘れて手をあげてしまいましたが、パネリス

トの駒込会員にお尋ねします。

今、簡吉の話がでまして、簡吉が1950年に白色テロで亡くなったというご発言でした。そうしますと、先生に問題を提起したいと思いますが、先生は、教育史ですので、教育学ですので、台南師範学校を出た人の中にもたくさん犠牲者がおられますね。高一生という山地のツォウ族の人は、1953年に亡くなっております。同じように簡吉が山地工作者であるとしたら、この人は、そういう中で53年に亡くなっている。これを先生はどういうふうに考えられるのか、ということをおたずねいたします。

【川島真会員】

ありがとうございます。まだまだご質問がおりかと思えます。時間も迫っておりますので、ここからお一人ずつ、5分でお答えいただければと思います。そうすると、5～6分オーバーして終わることになります。申し訳ありません。それでは、松田会員から、お答をいただきたいと思えます。マイクを渡してください。

【松田康博会員】

ありがとうございます。台湾政治研究が今後10年どうなっていくかということに加えて、私もともと自分の研究で目指していた歴史の連続性に関して、駒込会員のほうから鋭いご指摘をいただきました。

台湾の本省人の政治的抵抗に対する過小評価なのではないのかというご指摘がありました。これに二つお答えしますと、一つ目は駒込会員のご指摘の通りです。私自身が『台湾における一党独裁体制の成立』（慶應義塾大学出版会、2006年）でやった研究は——今回の報告テーマではなかったのですが、わからない中で話を聞かれる方には申し訳ないのですが——国民党がどうやって地方を統制したのかという章の名前にせざるを得ませんでした。最初は中央・地方関係あるいは国家・社会関係というような形で、社会からの抵抗なりというのを、もう少しみていくという形にしたかったのですが、資料的にも難しく、最終的には諦めてしまいました。まさにそこは私の研究の大きな弱点です。

ただ、二つ目のお答えはもう少し複雑かつ微妙です。第一は、1950年代の文献を読んで、色々な人のインタビューをやって、その一部を引用したのですが、当時実際に本省人の抵抗はほとんどできなかったというのが事実ではないかと感じています。

第二は、当時の統治集団にとってみると、実は本省人よりも外省人の方が怖かったのです。一番共産党が紛れ込んでいる可能性が大きいのは、一緒に大陸から逃げてきた外省人です。だから最も密に監視をした対象も、実は外省人の集団なのです。人数は比較的少なくても、外省人の方が政治的な力をもっていますから、彼らから情報が大陸に漏れることを恐れていたのです。これが本省人の記憶によると全然違って、自分たちが一方的に迫害を受けたという印象が強いのです。したがって当時の記憶について、本省人と外省人の間のギャップはかなり大きいと感じています。

第三は、本省人の「抵抗の記憶」というのが、後になって変化するということです。当たり前かもしれませんが、同じ事実でもその後どのような経験をするか、どのような物の考え方に変

わかっていくかによって、30年前、40年前、50年前の事実に対する記憶やその評価が変化することがあるのです。

報告の中では言いませんでしたが、例えば「台湾政治研究のこれからの10年」では、おそらく国民党の統治はそれほど悪くなかったのだという論調が出てくると思います。これまでは、本土派政権が20年も続いたため、国民党政権に対する全否定が進んだのですが、これからは民進黨政権の全否定というところからスタートして——革命政権ができたわけではありませんので、そんなに極端にならないとは思いますが——戦後の経済発展は国民党でなければできなかったとか、国民党のお陰で政治的安定が確保できて良かったんじゃないか、蒋介石は実は台湾を愛していたんだとか、国民党こそが今の中国の発展に参考となるモデルなどという議論が出てくるかもしれません。現在の政治的状況が変わると、ついこの間の記憶が、どんどん変わっていくということになります。

私が1950年代の歴史に関するインタビューで実際に経験したのは、高玉樹のケースです。高玉樹は党外人士で台北市長に当選したのですが、彼の主任秘書である柯台山がオーラルヒストリーで、高玉樹は主任秘書を選ぶのに、国民党の方からこの人を主任秘書にしろといわれたのを7回断って、それであなたにやってもらいたいといわれたから私は引き受けたと書いてあります。ところが実際に関係者の話を聞くと、まったく違うんです。実際に高玉樹は当選した次の日に、変装して帽子を深くかぶって国民党中央党部に裏口から入り、「すみません、私は当選してしまいました。私を国民党に入れてください」と頼んだのです。彼は民社党員ですし、国民党の幹部は、断りました。そんなことをやったら、アメリカ人も見ているわけですから、選挙は芝居だったということになってしまうからです。そこで、高玉樹は自分の主任秘書をご推薦くださいと国民党の幹部にお願いしたのです。でも、それが後には「われわれは国民党にすごい抵抗したんだ」というように、記憶が変わってくるのです。そういう事例をいくつか見ているんです。

やはり、抵抗というものは、おそらく心理的に悶々としているものがあったということが、もっと強く抵抗したような記憶に変わっていくのです。ですから、この当時の歴史というものを、その当時に実際にあったようにを復元していくことが、いかに難しいのかというのを、私はいろんなインタビューを通じて感じたわけ。言い換えるならば、抵抗の記録や記憶を相対化する作業をしなければ、事実を明らかにすることができないと強く感じています。ただ、ご指摘の簡吉や謝雪紅に関してきちんとした言及がないというご批判に対して、私は大いに反省したいと思います。以上です。

【佐藤幸人会員】

えーとですね、私の、まあ、お詫びというか、反省しなきゃいけない、この10年間で、私が、って、台湾学会の、まあ、どちらかというと、こう、一応その、執行部を務めていた者たちとして、いまひとつ、学際的研究の場として使いきれてこなかったという、えー、反省があります。

で、そういう意味で駒込会員の、今回のご提案というかご指摘は、大変、あの、歓迎すべきものだと思います。で、さらにいうと、私自身も、まあ、アイディアは多少あったんですけどね、

そういう意味で、まあ自分の研究あるいは駒込会員のご指摘と絡めると、えー、ひとつの、こう、横に連携してできる、イシューとして、あの一、物心ついた時は、要するにまあ、中華民国だったという人たちが、えー、実際に社会で活動する、社会のいろんな場で活動する時になった時に、どういう風に活動したかという、まあ、特に共通性みたいなのをみるようなことはできるんじゃないかと思っております。私の直接研究しているのだと、その、まさにハイテク産業を作った人たちですね。エイサーの施振榮とか、ああいう人たちの世代のことです。

で、というようなことが、問題として研究できるという前提にたった上で、駒込会員のご指摘に、えーっと、なんというか、反論含みのレスポンスをしたいと思うんですけども、えっと、まずですね、ひとつこれは直接ではないんですけど、ただまあ私がやろうとしたこと、私もこんなことしてたら、経済学者とはとてもいえないんですけど、ただ、その研究自体は、やっぱり経済学を意識しながら研究しているわけです。で、経済学ってのは、経済合理性で人は動くもんだ、という話でできているわけで。そうではないという、ナショナリズムみたいな、まあ、非常に経済合理性からみたら不合理なことが人を動かして、それが実は歴史を結構作ってくんだということを書きたかったんで。そのナショナリズムの中身自体は、まあ、私もその専門家でもありませんし、えー、深くは掘り下げておりません。むしろ、ナショナリズムってのがどう作用するかっていうところに、重点があったということで、まあ、半分ぐらいいい訳めいてますけど、えー、私の研究はそういうものだったということです。

それから、それは、まあ、とりあえずの応答なんですけれど、その、もうちょっと前向きな応答としてですね、そのナショナリズムは私の専門家ではないんで私もあまり議論すると、どんどんほろが出ますけれども、駒込会員が想定されているのよりは、もうちょっと広がりを持ったイメージを持っていいんじゃないかという風に思います。

えっと、ひとつはまず、曖昧だということですね。特に70年代あるいは民主化以前ですと、その自分のナショナリズムの向かっているのが、中華民国か、台湾なのか、そんなに多くの人は区別ついてなかったんじゃないかと思います。それから、あと、多様性ですね。まあ、多様性って、また、これも答えがないような答えですけども、たとえば、私の本の中で、その、半導体産業の草創期にペンシルベニア大学から帰って来る3人の博士がいて、そのうち2人が外省人で、1人が、えー、本省人ですね。で、彼らは、まあ、釣魚台のことに刺激をされたりして帰って来るんですけども、でも、やはり、ちょっとその間の、その、違いはあった。けれども、でも、さっきもいったけれども、作用としては同じふうには作用していると。

えー、それからあともうひとつ、これは是非強調したいのは、駒込会員のナショナリズム、ちょっと悲壮感が漂っているなど。暗中模索といわれましたけれども、くらーい中でもそこしかない出口を探して行くような、そういう話で捉えられたみたいですけど、もうちょっと明るく捉えて、明るいナショナリズム。で、企業家ってのは、基本的に明るい、楽観的なんですね。あの、それこそ、不合理なことやるんですから、楽観的じゃなきゃやっていけない部分があつてですね。まあ、ちょっと、だから、そういうナショナリズムも含めた感じで議論した方が、やっぱり広がりがあつていいんじゃないかと思います。

【三尾裕子会員】

台湾学会ができてよかったと思うのは、やはりそれまで台湾を研究している他の分野の方々のコミュニケーションの機会があまり無かったので、この学会ができて、文学とか、政治とか、経済とか、自分の専門とは異なる側面について勉強する機会ができた、ということです。また、今日のようにパネルディスカッションにお声がかかりますと、私が何もしゃべらなくても、自分の研究を紹介して下さって、批判して下さる方が現れるということで、大変嬉しいことです。そういうこともあり、駒込会員には、感謝しております。

それはそれといたしまして、私の研究については、かなり手厳しいご批判をいただきまして、しかし、論文を読んでらっしゃらない方々にはいったい何を議論されているのか、分かりにくいだろうと思いますので、多少まとめながら、批判に対する再批判をさせていただきたいと思いません。

発表の時にいいましたように、人類学における植民地主義人類学に対する批判を再考したいというのが、私の出発点でございます。つまり他者表象の学問がもつ、構造的な問題、支配者が被支配者を表象する権利を独占しているという問題、これをどう克服するのか、それをどうやって克服して人類学の記述のあり方を前進させていくのかということです。

事例のひとつとして、『民俗台湾』というものを取りあげたわけですが。この雑誌は、戦前の1941年から45年にかけて、自然人類学者の金関丈夫という台北帝大の教授を中心にして、発行された雑誌です。それについて、1990年代の半ばぐらいから、主に、人類学というよりは、文化研究というか、フォークロアというか、そういった方々から批判をされているという現状があるわけですが。批判には色んな側面あるのですが、簡単にまとめてしまうと、『民俗台湾』の関係者、日本人の学者達は、人種主義者であるとか優生主義者であるとか、それから、彼らは結局、植民地支配に資するための雑誌を作ったのであるという評価です。

私自身としては、直接的には、彼らが人種主義者であったか優生主義者であったかということ、判定することに目的があったわけではありません。すなわち、事実がどこにあるのかということは、やらなければいけない作業だとは思って、できる範囲でやりましたけれど、それを最終的に決めるということはほとんど不可能であろうと、つまり、どこに真実があるかということは、それぞれの参加者の立場によって違ったであろう、というのが私の見方です。それぞれの人にとっての真実があるだろうという風に思っております。ただ、だったらそれはそれで、もう人それぞれで終わりなのか、ということになってしまうわけですが、そうではないだろうと思います。私が指摘したかったのは、政治的な運動に自覚的に積極的に参加したとか、抗日であるとか、反帝国主義をやったか、ということ、目にみえる形でおこなう実践以外の形での、抵抗とっていいのかどうか分かりませんが、抵抗というと、既にもう違うという気がしますが、ある意味、日常的な世界の中での、例えば、非協力であるとか、面従腹背であるとか、無視とか、様々な植民地支配に対する対し方というのがあっていいのではないかと。それを、AかBか、0か1かという形で一枚岩的に回収してしまうということについての異議申し立てをしたかったということです。また、宗主国の人間は、すべからくAで、被支配者は、その対極のBである、と

決めてかかることも問題だと思います。

他者表象というものが、人文・社会科学系の研究においては、常に問題になるということは、人類学にたぶん限らなくて、歴史学をやっというと、政治学をやっというと、経済学をやっというと、たぶんそうなんだろうと思うんですね。我々は他者の代弁をして、台湾の人たちはこうだとか、台湾の社会はこうだった、台湾の文化はこうだったというふうにいつてきたけれど、それは、支配・被支配の構造の中で、統治者側だけが語る権利を独占してきたのであって、彼らは語る言葉を持たない、あるいは語れない人たちとして代弁されるしかなかった。それは、どんな学問をやっついてもそうだと思います。そういう意味では、金関も、駒込会員が指摘された、例えば矢内原忠雄などと構造的な意味において同じだと私は思います。ですから矢内原が免罪できないように、金関も免罪できない、同じ立場だろうと思います。金関たちは、台湾人にも記事を書いてもらおうとだいぶ苦心したようですが、そうだとすると、誰に書かせる権利を与えるかを決定できたのは、日本人の雑誌の中核メンバー達であって、台湾人ではありませんでした。しかし、そうだとすると、そういった構造の中で、どのようにして他者表象をしたのか、どのようなスタンスで台湾人と向き合おうとしたのか、彼らの頭上を覆っているより上位の権力（総督府や日本帝国そのもの）とどのように向き合おうとしたのか、それらは問う価値があると思います。しかし、そこでは、学問を標榜するわけですから、客観性が、最後はその学問の存亡を左右すると思います。学問的な客観性を失った研究というのは、当然、時代の流れの中でいずれは、淘汰されるでしょう。この学会が生き残るためには、やはり政治的な中立性というのを保証しなければいけない、ということと同じだろうと思います。

私が書きたかったのは、つまり、植民地統治者の中にもいい人がいたのだという、ただ、その多様性の語りだけを、したかったわけではありません。金関は悪い人じゃなかったよね、ということを手だいたいだけではないんですね。そうではなくて、植民地状況における植民者と被植民者の関係というのは、もちろん徹底的に抵抗した人、抗日した人、ナショナリズムに燃えた人たちというのがあります。しかしすべてをその抗日か協力者かということで語るということ、その当時のリアリティ、アクチュアリティというものがみえるのかどうか、という問題を私は考えたい。で、狭義の反帝国主義、狭義の抗日というものがのみが免罪されるというような学問批判のあり方がいいのかどうか、ということを手問いたいということですね。少なくとも、もちろんそういう人たちを評価することは、当然必要だと思いますけれども、日常の生活世界の中で、実際に日本人と台湾人のインタラクションがあるわけです。その中で、明らかな抵抗とはいえない、あるいは非協力とはいえないかもしれないけれども、微細なインタラクションの中で築かれる日本人と台湾人との関係というものを、一枚岩的な搾取・被搾取とか、統治・被統治というものに回収しない形で描いていくということが必要なのではないかと、いうことを、いつたかったのです。

最後に一言付け加えますと、先程、佐藤会員が、駒込会員の抗日は、悲壮感がある、とおっしゃっていました。私は駒込会員の歴史学は、ヒーローを求める歴史学なのかあとと思います。ヒーローというのは悲劇的なヒーローですね。そういう意味では、佐藤会員の感想に近いだと

思うんですけれども。駒込史学は、大きな物語、ヒーローを求める歴史学かもしれませんが、私が求めているのは、小さな物語かもしれないと。フォークロアのいい方をすれば常民の中にみられる日常生活の中で繰り返される微細な抵抗、あるいは非協力、無視などというものもありうるのではないかということ、いいなかったということです。歴史が作られていくのは、実は、大きな物語の陰にあるたくさんの市井の人々のアクチュアルな生き様であり、その複雑性こそが、多くの人間のありようなのだと思います。

【川島真会員】

はい、ありがとうございます。バトルが始まりそうではありますが、簡潔にお願いします。

【星名宏修会員】

駒込武会員の81ページから82ページにかけてです。他の3人の先生は新しい論文が取り上げられているのに、僕のは11年も前の論文。しかもこの論文は、書いた後になって、ものすごく大きな間違いに気がついて、改めて書き直したという、まあ、そういういわくつきのものなんです。

まずひとつは、この10年の間での、台湾文学研究の進展ということもあると思いますが、11年ぐらい前にこの論文を書こうと思った時に考えていたのは、こういうことなんです。

僕は、それ以前は、周金波とか陳火泉など皇民作家と呼ばれる人たちの作品を研究していたんですね。1990年代の頭ごろにそれをやっている頃には、まだ台湾においては、ほとんどそういう皇民文学についての研究がなされていなくて、そもそも周金波がどういう作品を書いたのかというところから、手探りで集めるところから始めていました。で、その中で気がついたのが、周金波、あるいは陳火泉に対する批判的な読みと、それとは対称的に楊逵という抗日作家に対する肯定的な読みというものがあるというふうな思ったわけなんです。つまり、皇民作家が批判されるのと同じ枠組みで、抵抗したとみなされる作家が表彰されているのではないかということに、徐々に、気持ちの悪さを感じるようになりました。

この論文を書いた1997年ぐらいまでの、楊逵の「吼えろ支那」に関する台湾における研究を集めていくと、すべての研究といってもいいと思いますが、共通していたのは楊逵が1979年か80年に、戦前の自分の活動を振り返った文章に依拠していること。で、その楊逵の回想録によると、「吼えろ支那」がアヘン戦争を舞台にしたものであるとか、日本人の浪人、林献堂を殴打したあの人間を出してきたとか述べているのですが、ほとんどの研究者がそれに乗っかって論文を書いているわけですね。それで、日本台湾学会の第二回大会だったと思いますが、「楊逵研究の現在」という分科会が設定された時に、僕は台湾における楊逵研究を批判しました。それは、「吼えろ支那」の研究にみられるような、戦後の作者の回想に依拠したような、親亀こければみなこけるみたいな形の、そうした研究がなされていることを批判しましたのは、そういう問題関心だったわけです。まず、これがひとつであります。

82ページで触れられている、垂水千恵会員が提起した読者の問題とか観客の問題とかは、これはまったく駒込会員がいうとおり非常に大事な論点だと思うんですね。台湾文学研究で読者の問題が提起されたのは、おそらく藤井省三会員が94年ぐらいに、大東亜戦争期における台湾読書市場の問題を提起したのが、はじめてではないかと思います。あの論文のもつ衝撃力は、読者の問

題をはじめて提起したということ。その後、批判もあつたり、論争を引き起こした論文なんですが、読者をめぐる論点というのは、90年代の半ばによく出てきたものですが、これは今、台湾文学研究の中では、重要なテーマとして注目されているというのが、ここ最近のことなんだろうと思います。

それで、この読者とそれから聴衆、それから観客ですよ。読者にしても観客にしても、特に観客の場合、演技やその場のアドリブで、実際にどのようなものが行われていたのかとか、そこで観客がどのように笑ったのかということは、資料としては残ってはいません。でも、それは実は、文学以外というふうに、駒込会員はおっしゃいましたが、文学研究の中の非常に重要な論点なんだろうと思っています。で、82ページの最後のところで書かれている、文学の外、では僕はないと思いますが、絶望感みたいなものをすくい上げていく研究というものが、文学研究では非常に重要だろうと思っています。

駒込会員の指摘は、面白いし、非常に重要な指摘だと思って受け止めました。

【川島真会員】

最後に駒込会員お願いします。

【駒込武会員】

ありがとうございます。これまでの議論で、私としては目的は達せられたと感じています。本当はもっと時間があればいいと思うんですけども、こうした形の議論というのが成り立ち得るんだということ自体が、私がやりたいことでありました。

三尾会員の反批判に対して、たしかにいわれてみれば、悲劇のヒーローを求めたがるところあるかもしれないと思います。ただで、簡吉の例はある種の極限だったので、そういう印象を与えたのかも知れませんが、もっと微細な抵抗があるというのは、まったくその通りだと思いますし、私自身が今やっている、ミッションスクールをめぐる研究というのも、いわば支配者のテーブルの上に乗って、その上で支配者と交渉する、そうした問題です。かつては、支配者との交渉のテーブルに乗ること自体が間違っているみたいな研究があったと思うんですけど、そうではない、やっぱ支配者との交渉の場面というのをもっとみなくてはいけないと思うんですね。ただ私がいいたかったのは、そのテーブルがどんどんせばまっていく歴史的状況というんでしょうか、そのテーブルの広さみたいなものを、正確に見定める必要があるだろうということなんです。

それから、下村会員のご質問は、簡吉が戦後中国共産党の党员として、いわゆる「山地工作」にたずさわったことをどう評価するのか、ということだと思います。そのことに対する明確な評価を下せるほど、私は今、史料を持っていないというか、きちんと勉強していません。ただ、私はその点は非常にネガティブにみえています。つまり、例えば、高一生だけではなくて、日野三郎（ロシン・ワタン）なんかとも簡吉ともに銃殺されていますが、ロシン・ワタンの甥の回想では、中国共産党のメンバーがやってきて、原住民はそういう意思じゃないのに、無理やり共産党の文脈に引き込まれたことによって、巻き込まれて、みんな殺されてしまったということがあるわけなんです。そうした意味でいえば、「工作」という発想自体がそんなわけなんです、「山地工作」は非常に問題の多い現象だったろうと思います。

私自身は、実は共産党の歴史的な役割をネガティブに評価する部分が大きくて、そうした研究もしてきませんでした。ですから簡吉という人間にも、実は、興味を感じてなかったんです。簡吉の書いた文章は「日本資本主義、世界資本主義を打倒せよ！」みたいなスローガンですから。でも、簡吉の獄中日記をみて、すごく人間的なものがあるんだと知りました。私からみれば、なぜ最後に中国共産党に入ってしまったんだと思ったりもするんですけども、なぜそういう方向に行ったのかということを含めて、他にどういう選択肢があったのかということも、考えなくてはいけないのではないかと考えています。

最後に、先ほどいい忘れたことで、付け加えさせていただきたいことがあります。領域を越えた台湾研究の必要ということをお願いしましたが、具体的なトピックスとして、ディスプリンを越えて論議できるような問題があるのではないかと感じています。

今日の話に即していえば、簡吉の息子である簡明仁さんが、貧しい生まれであったわけですが、アメリカに留学できたのは、簡吉の弟が祖先から受け継いだ財産を売り払った、その資金でアメリカに留学できたということです。70年前後に祖先の財産を売り払うというのは、どういうことだったのかってことを考えてみたいと思います。祖先の財産の意味、それを売り払うという行為は、経済学にも、人類学にも絡んでくると思います。皆さんに「暗い」といわれた簡吉の農民運動の話と、今、栄えている大衆コンピューターのイメージが分裂していますが、その境目、転換点は祖先の財産を売り払って簡明仁さんが留学したところだと思うんですね。

あるいは都市化というような現象については、例えば、上水流会員が「都市人類学」ということをいわれていますが、台湾における都市化という現象がどのように進行し、どのような意味をもったのか。それは、歴史学とか、人類学とか、経済学を越えて対話できることではないか。このように対話のできる具体的なトピックというのでしょうか、それこそ佐藤会員の言葉を借りれば入港点ともいべきものを、これからもっと探していけないだろうかと思っています。

【川島真会員】

ありがとうございます。10分オーバーの状態でございます。もう李遠哲先生がお待ちでございます。本当に申し訳ないのですけれども。

今日、冒頭で若林先生からも、あるいは春山先生からも、話がありましたが、日本台湾学会も、会員数が460人になって、この10年間で会員が倍増いたしました。すでにある意味で、政治と距離をとって学問する、アカデミックにやるということは、達成されたということができると思います。

ただ、地域研究として学際的にやるという部分について、この10年間でどれほどできたかといわれると首をかしげてしまいます。個々の分野で、それぞれの研究が進んできたという面があるのではないかと、今日あらためて、駒込会員の「後出し」から、確認ができたかもしれないというふうに、思っております。

また、台湾及び世界の変化の中で、研究をめぐる情報量が増加していること、また、その分析枠組みが多様化していること、そして研究の進展に伴って、細分化がいつそう進んでいる中で、学際的で、かつ、ある種工夫がなされた研究枠組みをいかに作り上げるのかということ、さらに

は、台湾における台湾研究といかなる距離をとるのかというような課題が、このシンポジウムで指摘された論点の最大公約数であったのではないかとおもいます。

このような、情報量が多く、分析枠組みが多分化し、研究が細分化しているので学際化しなければならない、とか、台湾っていう現地における研究といかなる距離をとるべきかかといったような課題は、実は日本の多くの外国研究が抱えている課題だということもできるのではないのでしょうか。もちろん台湾の変化が激しい、ということもあるのでしょうけれども、こうした課題をいかに受け止めるかというのは、台湾以外の地域研究とも対話をしながら、位置づけを模索していくというのが、これからの10年間の課題になるのだらうと思われまます。

司会の不手際でございまして、12～3分オーバーしてしまい本当に申し訳ありません。ここで、今日のこのディスカッションは終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

(了)